

アフリカ諸語研究最前線



海外交流

小 森 淳 子*

From the Forefront of African Language Studies

Key Words : African Languages, 4 phyla, Multilingual Situations, Neo-colonialism

1. はじめに

大阪大学外国語学部スワヒリ語専攻では、東アフリカの共通語であるスワヒリ語を中心に教授しているが、学生はスワヒリ語を入口として、広くアフリカの文化や社会について学び、アフリカの諸問題に関心を寄せている。初めは「貧困」や「紛争」、「援助」や「資源開発」などといった、アフリカに対する典型的で一方的な「まなざし」しかもたなかった学生も、やがてアフリカが独自の歴史と文化をもつ豊かな大陸であり、多様性に富んだ人々が主体的に生活を営んでいる場であることを知る。援助を与える側、資源を収奪する側に、先験的に立っている自分の立場を疑い、まずは多様性に富んだアフリカの本当の姿を学ばなければならないことを知る。

アフリカの多様性はこの大陸に存在する言語にも表れている。米国 NPO の SIL インターナショナルが世界の言語をリストしているサイト (Ethnologue) を見ると、「アフリカ」(約 11 億人) の言語の数として 2139 という数字があげられている。言語の数というのは、方言のとらえ方や民族区分など言語外の要素に大きく関係しているので、この数字は一つの日安でしかないが、それでもおよそ 2000 の言語があるというのは、アフリカの言語の多様性を物語っていると言っているだろう (ちなみに、同サイトで「アジア」(約 44 億人) の言語として挙げられて

いる数は 2296 である)。ここでは、アフリカの言語について、全体的な分布や分類、特徴などについて紹介し、アフリカの一般的な言語状況や言語問題といったものについて概観していきたい。

2. アフリカの言語分布・分類・特徴

言語の分類は一般に、同じ「祖語」から分かれてきたと想定される同系統の言語を、同じ「語群」や「語派」、さらに上位グループの「語族」(language family) にまとめる系統的なものが中心である。「語族」という概念は、古代の碑文や文献資料が豊富なインド・ヨーロッパ語族の比較研究から生まれ発展したもので、アフリカのように古い文献資料というものがあまり望めない地域では、厳密な意味での「語族」の系統関係の証明はなかなか難しい。

アフリカの言語の分類は、1960 年代にアメリカの言語学者グリーンバーグが語彙の大量比較によって提唱した 4 つの語族の分類が基準になっている。グリーンバーグ以降、現地での記述調査が進み、多くの言語データが得られるようになって、語派や語群など下位の系統関係はかなりの程度、科学的に証明されてきている。近年では、系統関係が証明されている大きな分類を「語族」と呼び、さらにその上位の分類には phylum (語門) というラベルが当てられている。この用語はまだ一般的でないので、ここでは phylum に相当するものを従来通り「語族」と呼んで、以下に 4 つの語族と、その他の言語の紹介をしておこう (図 1 参照)。

① ニジェール・コンゴ語族

サハラ以南アフリカのほぼ全域に分布する言語群で、アフリカの言語の約 4 分の 3 がこの語族に属する。西から主要な言語名を挙げてみると、セネガルのウォロフ語、マリのバンバラ語、ガーナのアカン



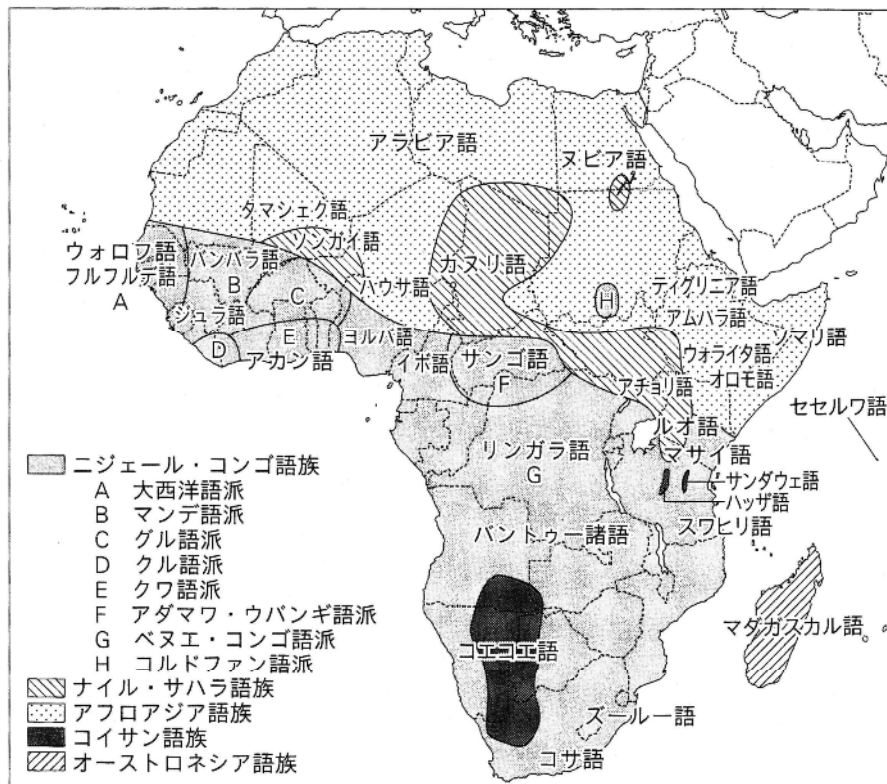
* Junko KOMORI

1963年8月生

京都大学大学院文学研究科 (言語学専攻)
修了、博士(文学)現在、大阪大学大学院言語文化研究科
准教授 アフリカ言語学

TEL : 072-730-5210

E-mail : komori@lang.osaka-u.ac.jp



(図1 アフリカの言語分布 (出典:『アフリカ社会を学ぶ人のために』 p.31))

語、ナイジェリアのヨルバ語、コンゴのリンガラ語、東アフリカのスワヒリ語、南アフリカのズールー語などが話者数の多い大言語である。リンガラ語やスワヒリ語、ズールー語が属するバントゥ諸語は、この語族の下位の語派（ベヌエ・コンゴ語派）のさらに下位の一語群であるが、赤道以南の全域に広く分布している。バントゥ諸語には500ほどの言語があるが、分散と分岐の歴史が浅く、全体によく似た語彙と構造を保持している。

ニジェール・コンゴ語族を特徴づける言語特徴は「名詞クラス」と動詞構造であると言われているが、これらの特徴が最もよく見られるのがバントゥ諸語である。「名詞クラス」というのは、名詞がその形態によっていくつかのグループに分かれている体系のことで、たとえばウガンダのガンダ語には21のクラスがある。それぞれのクラスは名詞につく接辞の形で区別されるが、名詞だけでなく指示詞や形容詞など名詞を修飾する語句の形や、動詞につく接辞の形も名詞クラスによって異なってくる。ニジェール・コンゴ語族の中でも西の語派では名詞クラスがなかったり、その痕跡しか見られなかったりする。

またバントゥ諸語の中でも西の言語ほど名詞クラスの数が少なくなっている。名詞クラスの歴史的変遷や変革はニジェール・コンゴ語族全体の研究にとっても、大変興味深いテーマである。

② アフロアジア語族

名前の通り、中東からアフリカにかけて分布している語族で、歴史的には古代エジプト語やアッカド語、アラム語など碑文や文献資料が残る文明言語を擁しており、下位の主要な語派であるセム語派の研究の歴史は長い。セム語派では、現代ではアラビア語やヘブライ語が有名であるが、アフリカ大陸に限れば、エチオピアの公用語であるアムハラ語やエリトリアのティグリニャ語などを挙げることができる。他にクシ語派（ソマリ語やエチオピアのオロモ語など）、オモ語派（エチオピア南西部）、チャド語派（ハウサ語など）、そして北西アフリカからサハラ砂漠にかけて点在するベルベル語群がこの語族に属している。この語族は名詞に女性・男性の区別があり、名詞が格変化するという特徴が共通している。

③ ナイル・サハラ語族

これも名前の通り、ナイル川流域とサハラ南縁に分布する言語群であり、東アフリカの牧畜民の言語であるマサイ語が有名であろう。この語族は同系であると認められるいくつかの下位グループからなるが、たとえばマサイ語が属するナイル語群と、西アフリカのニジェール川流域のソンガイ語群が同系であるかどうか認定することは難しい。ソンガイ語群はいちおうこの語族に分類されているが、隣接するマンデ語派（ニジェール・コンゴ語族）やベルベル語群（アフロアジア語族）に強い影響を受けているので、過去の文献資料などがなければ、系統関係を証明することは難しい。

④ コイサン語族

南部アフリカの「ブッシュマン」と呼ばれる人々が話す言語をまとめた語群で30ほどの言語がある。系統的には大きく3つの語派に分かれており、それらが一つの系統をなすかどうかは議論がある。コイサン語族の大きな特徴は「クリック子音」（吸着音）があることで、私たちが舌打ちするような時に出す音が子音として使われている。この珍しい言語特徴は近隣のバントゥ諸語にも伝播し、ズールー語やコサ語にもクリック子音がみられる。

以上が、アフリカ大陸に見られる4つの語族の概略であるが、アフリカにはこれらの語族に属さない言語がある。マダガスカル語は、東南アジア島嶼地域からオセアニアに広く分布するオーストロネシア語族に属する言語で、東南アジアから海を越えてやってきた歴史がある。また、南アフリカやナミビアで話されているアフリカーンス語は、アフリカに入植したオランダ人の言語が独自の変化を遂げたもので、系統的にはオランダ語の一種といえる。さらに、西アフリカにはヨーロッパの言語がベースとなって作られ、共通語として用いられているピジン・クレオール語がある。ポルトガル語ベースのクレオール語（ギニアビサウ、カーボベルデ）や、英語ベースのクリオ語（シエラレオネ、リベリア）、ナイジェリア・ピジン語などが有名である。これらの言語は元になるポルトガル語や英語に対して「崩れた」、「劣った」言語であるというレッテルを貼られてきたが、言語学的に見れば、独自の文法をもち体系化

された「立派な」言語であり、ピジン・クレオールに対する正しい認識が広まってきている現在、言語生成のメカニズムや普遍性の観点からも研究対象として注目されている。

3. アフリカの言語状況と言語問題

「アフリカには2000を数える言語がある」と言って喜び、上にみたような言語のラインナップに興味をもち、一つ一つの言語の構造や文法に大いに関心を示すのは、残念ながら言語学者くらいで、多くの人にとっては「アフリカでは英語やフランス語が通じるんでしょ」くらいの認識かと思う。それはある一面では正しいが、ある一面ではアフリカの「言語問題」とも呼べる側面を表している。

アフリカでは多くの民族（「部族」はアフリカ蔑視のニュアンスが含まれるので使わない）が共存している。それぞれの民族には固有の言語があり、多言語が共存している状態である。他の民族とのコミュニケーションに用いられる言語は地域の共通語であり、それは多数派の民族語（セネガルのウォロフ語やマリのバンバラ語、ガーナのアカン語、南アフリカのズールー語など）であったり、歴史的に通商用として広まった共通語（サハラ南縁のハウサ語や東アフリカのスワヒリ語など）であったりする。一般に、村落レベルでは民族語、より広域では地域の共通語が用いられており、人々は複数の言語を使い分け、多民族・多言語の共生が常態である。

しかし、アフリカでは植民地支配から独立する時、多くの国が国家統一のための言語として、旧宗主国の言語である英語やフランス語、ポルトガル語を公用語とした。一般の人々には馴染みがなく、使いこなせない言語であり、一部の権力者だけが読み書きでき、使いこなせる言語である。「多民族国家の統一言語として、一つの民族語を選ぶと不平等になるので、旧宗主国の言語が選ばれた」というもっともらしい理由がよく聞かれるが、植民地時代の国境線を引き継ぐ形で独立した新国家の支配層にとっては、旧宗主国の言語は権力を受け継いだ象徴であり、支配層と一般の人々との間の「不平等」を維持するものであった。ここにアフリカの「言語問題」が存在する。アフリカの言語問題とは一つの国家に多数の言語があるということではなく、独立後もずっと旧宗主国のヨーロッパ言語が支配言語として君臨し続

け、支配層と一般の人々を分断するための道具として使われ続けているということにある。アフリカではどの国においても、アフリカ固有の言語でなく、英語、フランス語、ポルトガル語でしか高等教育を受けることができず、また政治や行政にも参加することができないのである。

もちろん、タンザニアやエチオピアなど、アフリカ固有の言語を公用語として普及させてきた例もある。特にタンザニアでは、初代大統領ニエレレの尽力により、スワヒリ語を公用語として普及させる努力がなされ、小学校の教育用言語として、また行政やマスメディアの言語として用いられてきた。しかしそのようなタンザニアでさえ、中学校以上の教育用言語は英語である。高等教育までスワヒリ語でおこなうという独立以来の目標は、それが果たされるどころか、逆に小学校の教育用言語も英語にしよう

という潮流になっている。アフリカ諸国における、このような欧米言語の君臨はまさに、言語から見た「新植民地主義」といえる。

アフリカ諸国が独立して半世紀が経ったが、中国も加わって資源の争奪戦は激しさを増している。「安価な労働力と原料の供給地であり、工業製品の市場」という、植民地時代から変わらない経済構造や、「援助」という名の先進国との依存関係は、まさに「新植民地主義」の様態である。そして、欧米の言語がどのアフリカの国においても、最も権威のある言語であり、支配層の言語であるということが、言語面における「新植民地主義」のあらわれである。しかし、この問題の重要性は、英語のグローバル化の陰にも隠れて、なかなか認識されないことであり、言語面における「脱植民地主義」への道のりは遠い。

